高橋克彦

竜の柩 下

の柩〈下〉

高橋克彦

祥伝社

大河伝奇小説　竜の柩（ひつぎ）〈下〉

平成元年4月10日　初版第1刷発行
平成4年7月25日　　第12刷発行

著　者　高橋克彦（たかはしかつひこ）
発行者　伊賀弘三良
発行所　祥伝社（しょうでんしゃ）
〒101　東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (3265) 2081 (営業)
☎ 03 (3265) 2080 (編集)
印　刷　萩原印刷
製　本　ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。
Printed in Japan.

ISBN4-396-63009-3 C0093

© Katsuhiko Takahashi, 1989

竜の柩〈下〉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

竜の柩〈下〉目次

シヴァ……8
モヘンジョ・ダロ……97
アナトリア……185
アララト……288
エピローグ……335

装画&装幀・横尾忠則

竜の柩（ひつぎ）　下

シヴァ

1

「今度はノアの方舟か……おまえと一緒にいれば人生も退屈せんの」
宗像剛蔵は口取りの箸を休めて九鬼虹人を見つめた。相談したいことがあると昼に連絡を受けて、今夜は虹人を馴染みの料亭に招いている。虹人の隣りに腰掛けている部下の南波弘道の顔にも、同意と苦笑の両方が見られた。
「おまけにマローン財団が関係しているとはな……鹿角典征の件がようやく片付いたばかりだというのに、よくよく面倒を持ち込む男だ」
宗像は珍しく溜め息を吐いた。箸を使おうとした指がそのまま止まった。食欲がなくなったのだろう。宗像は箸を膳に戻した。
「面倒ですか？」
虹人は戸惑いを覚えた。もともと経済情勢とか世俗に関心の薄い自分だが、一応の常識は持っているつもりだ。マローン財団など一度として耳にしたことのない名前である。
「本当に知らんのか？」
宗像は虹人を見据えた。
「もっとも……今の時代では知らんで当たり前か。表向きはベネチアガラスで財を成しているが、戦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前はイタリアでも有数なナチスの協力者だった。逃亡機関のオデッサとも密接な関係があると囁かれての」
「オデッサ！　ブラジルのですか」
「今の当主ではない。先々代のマローンじゃ。イタリアと同盟を結んでいたときに来日したこともあった。なかなかの食わせ者でな」
虹人は腕を組んだ。そういう財団なら日本人の青年に好意を抱くのも分かる。
「ナチス党員を国外に脱出させる報酬としてかなりのダイヤがマローンの金庫に運ばれたとも聞いておる。もちろん噂じゃろうが」
「今の当主はどんな人間です？」
「孫のはずじゃが……よく知らん」
「マローン財団は美術や歴史に興味を抱いているんでしょうか」
「金になればなんでもやろう」
「たとえば方舟の発掘でも？」
「それは分からん。金になるのか？」
逆に宗像が訊ねてきた。虹人は天井を見上げた。むずかしい質問だ。むろん発見できれば全世界の注目を浴びることは必至だ。しかし、金銭的にはどうだろう。トルコ政府が発見者に方舟を渡すとも思えない。結局、発見者の名誉でしかないのではないか。こっそり持ち出すにはあまりにも巨大な遺物だ。また、それが可能だとしても、今度は世界に発表ができなくなる。明らかな盗掘を世間に公言するようなものである。
「だろうな。金にするのは厄介な代物だ」
宗像も即座に頷いた。

「本当にマローン財団が乗り出したというなら、それは別のものだったはずじゃ」
「つまり……龍だと？」
南波が銚子を差し出しながら言った。
「そこまでは知らん」
宗像は大声で笑った。
「が……危険な相手には違いない。なるべく関わり合いにはならんほうがいい。日本ならまだしも、イタリアでは儂の力も及ばんぞ」
「イタリアに行くつもりはありません。今度の目標はあくまでも中近東ですから」
「イラクか……それも面倒な話じゃの」
宗像は眉をしかめて杯を干した。医者から酒量を決められているはずなのに、今夜はピッチが早い。南波は宗像が杯を自分から差し出すまで注ごうとしなかった。
「構わん。虹人とおれば健康などなんの意味もないわ。また命を縮めようとしておる」
南波も肩を揺すらせて笑った。
「今度は特に危険じゃな。海外では咄嗟の応援も不可能じゃ。といって諦める男でもあるまい。まったく頭の痛くなる人間だ」
「なんとかなりますよ。今のところはマローン財団とてオレの存在を知らない」
「鹿角がおるではないか。手を引くと約束はしたが、ヤツのことだ。われわれの監視を怠っているとも思えん。日本では表立った行動に移らんかもしれんが……海外はどうかの」
「追って来ますか」
「おそらくな。龍の秘密を知られてはまずいことがヤツにはあるのだろう。おまえの動きを見れば、目的は分からずとも必ずマークしてくるはずだ。事故に見せかけられて殺されでもすれば……儂にも

打つ手がない」
「鹿角の組織であれば、むしろ日本よりも外国のほうが動きやすいでしょう。キリスト教は全世界に拡がっています」
南波も不安な顔をした。
「中近東やインドは別です。ヒンドゥー教やイスラム教が主体だ。キリスト教信者なんて各国に二、三パーセントしかいない」
「それでも何百万という数になる。こっちはいったい何人だと思っているんです」
「……」
「いかに南波とて防ぎきれる数ではない」
宗像は口許に笑みを洩らした。
「南波さん？　じゃあ」
「当然だ。おまえのように無軌道な人間を一人で出してやるわけにはいかん。どうしても行くと言うなら、こちらも人数を送り込む」
「そりゃ、ありがたい話ですが……」
「迷惑そうな顔じゃの」
「あんまりゾロゾロ行けば、かえって鹿角の目につくんじゃないかと」
「鹿角を舐めると命取りじゃぞ。たとえおまえ一人でもヤツには発覚する。どうせならはじめから大勢のほうが安心じゃ。もっとも行動は別々でも構わんが……南波だけは監視役として終始おまえに同行させる」
「こちらのメンバーはどれだけ？」
「いくらでも……と言いたいところじゃが、あの蓉という娘はどうかな。まだ若すぎる。むざむざと

死なせるわけにもいかんだろう。今度の旅は観光旅行とは違う」
「もちろんです。オレも考えていません。東と純だけを連れて行こうと思っていました。それに……」
「その方舟の話を持ち込んできた娘か」
「ええ、危険は伝えてあります」
「緒方君はどうする」
「彼には連絡要員として残ってもらうことで了解を得ています。いったん海外に出てしまえば細かな調査もできなくなる。逆に日本のほうが情報は集めやすい。念のためです」
「それでは、儂も十二、三人やろう。南波、人選はすべて任せる。武器の調達はどうだ」
「問題ありません。重火器は厄介ですが。他は現地で簡単にカタがつきます」
「相手もまさかミサイルで攻撃はしてこんだろう。それで間に合う」
宗像は満足そうに首を振った。
「ところで……最初はどこに行く?」
「インドから」
「なにか手掛かりでもあるのか?」
宗像は首を捻った。
「アララト山という目標があるなら、真っ直ぐトルコに向かえばいいのではないか。ウロウロしておればそれだけ危険も増えるぞ」
「アララトのどこを捜すんです。マローン財団が入手したという古地図でもあれば別ですが、それこそ時間の無駄だ。富士山の倍近くもある巨大な山なんですよ。それに……登山の専門家に訊ねてみたら笑われました。素人が簡単に登れる山じゃない。その場合はよほどの装備と確証がないと」

「儂の部下にはプロが何人もいる」
「今のところはまだ決心が……」
「慎重じゃの。怖いか？」
「分かりません。仮説に自信が持てないと言うほうが本音かな。確かにアララトには秘密が隠されている気もしますがね。もうしばらく周辺を押さえてからじゃないと」
「なるほど。そのとおりかもしれん……南波、それを出してくれ」
宗像は顎で命じた。南波は頷くと側のアタッシェ・ケースから百ドル札の束を無造作に取り出してテーブルに積み上げた。
「五千万円分用意した。おまえの好きに使え。これで足りなければ各国の東京銀行におまえの口座を開いておく」
「五千万！」
虹人は絶句した。
「儂の部下の分は南波に別に持たせる」
「しかし……多すぎます」
「生きて戻って……あまっていたら返せ」
宗像は微笑して、
「死んだおまえの祖父には昔世話になった。この程度の金では礼にもならんくらいにな」
「どういうつき合いだったんです？」
「まあよい。古い話じゃ」
またはぐらかす。いつ訊ねてもまともに答えてくれたためしがない。
「インドではなにを調べる？」

宗像は話をもとに戻した。
「仏陀がナーガ一族の出身だということはご存じですか？」
「ナーガ？」
「蛇のことです。つまり龍」
「ほほう」
「龍の一族と言っても、龍をトーテムとした一族という意味にすぎませんが」
「……」
「十二支に唯一想像の動物である龍が加えられているのは、そのせいなんです」
これには面白い寓話が伝えられている。仏陀が亡くなられたときに、人間ばかりか動物までもがその死を嘆き悲しみ枕頭に集まって来た。その順番どおりに十二支が定められたと言うのだ。猫は持ち前の無関心さからか、その場に来なかった。だから外されたのである。これは十二支の成立を説明するというよりも、なぜ猫が十二支に選ばれなかったかのエピソードとして伝えられた話なので、それ以上の情報は加えられていないが、もし本当の話であるなら、どうして枕頭に想像上の動物が来られたのか疑問が残る。しかし、仏陀がナーガ一族、つまり龍をトーテムとした一族の希望の星であったと分かれば謎も解決する。たとえ姿形が見えなくとも、必ず側にいるはずだと人間たちは考えたのだろう。また、この十二支の話からは、龍が蛇とは違う存在だと当時の人々が考えていたことも分かる。ちゃんと十二支には蛇も加えられているのだ。ちなみに最近の中国では十二支に龍があることに疑問を抱き、それを外して代わりにパンダを入れるべきだと主張する人々もいるらしい。想像の動物では不自然だというのが表向きの理由だが、実際は龍が帝王の象徴であるからだ。帝王はもう必要がない国家なのだ。この考えが進めば、いずれ中国から龍の痕跡がなくなる日さえ来るかもしれない。
「ナーガとはなんだったのか。どうしてそれをトーテムとする人々が誕生したのか。仏陀を辿ればな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com